

## M<sup>me</sup> Éloffé

**Modes et usages au temps de Marie-Antoinette, livre-journal de Madame Éloffé, marchande de modes, couturière lingère ordinaire de la reine et des dames de sa cour, 2v.** écriture par M<sup>me</sup> Éloffé et ed. par Gustave Armand Henride Reiset.

Paris, Libraire de Firmin-Didot, 1885. (文献番号 3 - 231)

Hilar p. 269, 742 Colas 2533 Lipperheide 1150

### エロフ夫人記

マリー・アントワネット時代の流行と慣習、王妃と宮廷貴婦人たち御用の服飾品商、及び婦人服裁縫師エロフ夫人の日記 全2巻

ヴェルサイユ宮出入りの一商人エロフ夫人の、1787年から1793年までの克明な日誌を中心として、この時期の服飾や慣習の細部について記述した文献である。第1巻は1787年から1790年まで483頁、第2巻は1790年から1793年までの540頁にわたる大著で合計200点の図版は、当時のファッション・プレート、王妃の遺品、流行した装飾の写真、肖像画などから成っており、うち68枚は色刷りである。

前文によれば、編者レイゼ伯爵は、本書発刊の約100年以前のロココ時代の王妃マリー・アントワネットに深く傾倒し、様々なつてを求めてその遺品、肖像画、ゆかりある人々に接するうちにこのエロフ夫人の日誌に遭遇した。その細密な記録に触れる過程で、従来享乐的で浪費癖があると言われた王妃とは食い違った、当時の貴族社会としてはごく普通の一女性の姿を見出したと語っている。

エロフ夫人の素姓については編者もつまびらかにはしていないが、日誌の中では王妃、王女、侯妃、公妃、大富豪夫人向け一流のクチュリエルで、その伯母と思われるポンペ夫人の後継者と自称している。2人の名はパリの年刊の商人名簿には見当たらないが、恐らく王妃の下着類専門の商人として宮廷に出入りし始めたのだろうと編者は推測している。そして、王妃の幸福な時期に始めた取り引きを、革命勃発から1793年10月の処刑までの悲惨な数年間にも継続し、忠誠を尽くしたが、この点はローズ・ベルタンと大きく異なるところと言えよ



う。日誌は1793年8月19日でとぎれている。王党派であることを隠そうとしなかった夫人のその後の生死、運命については、不明とのことである。

日誌は一日ごとの納入に関して、客名、品名、数量、形、価格などを記しているのみで、商売用の覚え書風である。しかし、当時流行の細々とした婦人服の装飾、ことにレースやリボン、また生地など種類、色、形などを知るにはかっこうの資料である。また、編者は日誌に登場する人物の素姓、経歴、その日の社会的・個人的事件の解説を詳細に付記しており、さらに脚注に、服飾専門用語の簡単な説明も加えている。

巻末には1793年パリ刊の「マリー・アントワネットの死」と題する歌の楽譜、王妃に対してのみの納品の年代順リストがある。

図・左は、第1巻扉頁 トリアノン宮でのマリー・アントワネットの肖像画、シカルディ筆、ローブ・シュミーズ、ゴール、クレオールなどと呼ばれたくつろいだ服装をしており、同様の服装をした他の画家の肖像画から、1783年ごろと推測される。

図・右はポロネーズ風のローブ、帆船を形どった“ベル・プール（可愛いひよこ）型”の帽子をつけた女性像。1787年ごろ。

